
七夕 7 / 7

ALFRED

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕 7 / 7

【著者名】

【作者名】

ALFRED

N6106E

【あらすじ】

七夕でほのぼのする、ALF 小説界の住民たちの一幕。

七夕の巻き

登場人物

静聖夜	(俺)	兄
静美羅	(姫っち)	妹
静 リナ	(リナっち)	居候 口リ
泉 光	(スフィー)	彼女
黒崎 安寿	(アンジュ)	彼女
希峰崎由姫	(姫ちゃん)	後輩 口リ2
静寂 子小美	(しおみん)	先輩
巳鈴鹿 珠子	(たまちゃん)	先輩
清原 太平	(たぐくん)	小説家
犬上 太一	(たいちくん)	大学生(法学部)
宮乃狼 聖	(ひーちゃん)	大学生(医学部)
金時 王子丸	(爺ちゃん)	爺
現夢 炎	(変態)	変態親父
天光 翼	(ひきこもり)	変態の妻

人の夢と書いて偽り、と言つ名台詞を残した知り合いを思い出し
ながら、汗でべた付くTシャツの氣味の悪い感触に耐えつつ、
ふと、俺は思ったことを口にした。

「何をしてかしているかと言つと、ぶつちやけ七夕の笛を仕込んで
いるわけなんですねコレが」
「誰に向かつていつているんですか、静兄さん」

ボロアパート。倒壊寸前と思われても不思議は無い一角。

舞台は、7月7日……七夕。

発端は

「……7月7日なのに味気ねえなあ」

と言い出した、どつかの季節馬鹿だつたりする。

俺だった。

つつゝか、大切な戦友と、友人から娘を預かった手前、一人には情操教育上、好ましい環境で、是非育つて欲しい！ なんて親心ならぬ、兄心というものが沸々と湧き上がつてくると思わないのかね？ 諸君！

「兄さん、どこに向かつて鉄拳突き上げているのです？」

「ん？ ここの世界を眺めているどこのその神々たち！」

「痛いですよ、兄さん」

……シオン、妹はたくましく育つているぜ。

「おや、七夕ですか？」

と、俺らの部屋の真下から、ひょこっと顔を出した好青年の姿。

「あ、犬上のお兄さん」

「ここにちは、美羅ちゃん。……うわあ、本格的ですね」

と、俺が抱えているどでかい笹を見上げる。

犬上君は180cmの体格のいいスポーツタイプながら、筋肉質には見えない、爽やかな好青年そのままのタイプであり、そんな彼が見上げるのだから、笹はすなわち……俺の身長の約一倍。

「あそここの木崎神社から、神主のおつちゃんと頼んで、少しわけて

「もうつたんだ」

「へえ……つて、木崎神社つてかなり距離あるじゃないですか。歩いた……んでしようね」

「ふ、稀に見る戦士の生還に、犬上君も感心している模様。

「まつたく、非効率極まるじゃないか。車を使えばいいのに」

「おつと、ひ~ちゃん? そりや俺が免許持っていないあてつけで

すかい? そんなこと言つなら……」

「僕はそんな卑屈じやない。そこに平田だと書つたのに学校にも行かず、暇を持て余している隣人がいるではないか」

ひ~ちゃん」と、宮乃王 聖君。太一君と同居中の、大学生コンビ。

力と技のダブルブリッジと世間にには定評してくる。

俺がしたんだが

「今日は講義がお休みなんだよ」

「ふむ、では どうせ手伝うのだろう?」

ひ~ちゃん、た~ちゃん、パーティー!

と叫うわけで、俺たちはボロアパートの庭に……

しまつた! 忘れていた、庭の主が居たのを……

「あ、きんとき金時爺さん」

「ツツツ!」

そのときの俺は、戦慄以外、何も感じなかつた。

寡黙で、鋭く、まるで納刀された刃のような爺さんが

「」の糞暑い夏に汗すらかかないことで定評のある金時爺さんが、

冷や汗をこぼしていた。

相手は……あ、納得。

爺さんは将棋をしていた。ちなみに俺は全敗。

このボロアパートの入居の第一関門、爺さんとの将棋将棋に関しては説明は要らないだろうが、俺的簡略して説明するなら、駒を使ったゲームだ。

日本の伝統文化でもありながら、奨励会など、世界的にも広がっている世界一の知略ゲームであるとも言われている。それはさすがに大げさだらうか……。

だが、伝統文化であるからには、それ相応の礼節や態度が、爺ちゃんの将棋で試される。

正直、ろくでもない爺さんだった。駒を手足のように使い、相手の感情まで自在に操つてくる。

それで、相手の本性を暴くと言つのだからえげつない。後で聞いた話、それで調子乗つたミュージシャンもどきが、無礼を仕出かして、半年の長期入院を食らつたとか……。

それに気づいた俺は、ならばと力将棋で押し合つて、あつさり負けた。

たまに揉んでもらつて、負けたら按摩している謎の間柄だが、最近爺ちゃんは、彼女に夢中であつたりする。

静寂 しじま 子小美。諸事情で俺が保護者している、女子高生。

趣味は知略、策略、戦略。

ようするに頭を使うことが大好きな女子高生、なんだけどスタイルは日本人形顔負けの、スタイルシユなロングストレート美少女。なんでも、身長が欲しくて牛乳を飲んでいたら、全身に現れたらしい。切れ目の相貌が、可愛いよりは美人と言つ要素をふんだんに引き立ててくれる。

そんな彼女が、和服 着物姿で浴衣姿の爺ちゃんを相手にしていたら、そりや一瞬、硬直する。つてか、絵になる。

「残念だ、視聴者にこの光景が見せられないなんて」「この世界は小説ですか？」

「いや、ドラマCDだからな。子小美つちの声優さんは優秀だからなあ。アンジューとスフィーの声も重複してくれているし」「だとしたら、その声優さんのギャラは三人分の三倍を、今ここで表明させていただきましょ！」

「うへえ！ どうする製作さん！ 声優さんの反乱だぜー！」

「……相手にしてあげたのですから、少し黙つてください。静聖夜」「……はい」「……はい」

爺ちゃんがギョロつと俺を睨んで来て中断。しおみんも将棋盤に視線を落とし、白い指で一手、歩を置いた。

爺ちゃんの冷や汗が増えて、止まつた。

「私の勝ちですね」

「……むう」

「ほい、お疲れさん

「別に疲れるほどではございません。で、静聖夜？ 用意はしてあるので？」

「用意つて……七夕？」

小さくうなずいて、首肯。

この娘、まったく人を先々読んでくれる。俺の行動パターンから、びくせやるんだろうと

「で、着物を着て遊びに來たと

「私だけでは……」

と、爺さんが将棋盤を相手に睨つていてる背後で……「うわっち

やあ。

着物を着崩すぞ」いろではなく、完全にはだけをせつかつ、下のサ
「ワシまでピンチじゃねえか！

「ゼラハマロでよかつた。禁止へいりつといひだつたぜ」

刹那、俺の顔面に『姫ツち』の飛び蹴りが飛んでくるのだった。

巳鈴鹿 珠子。やつぱり女子高生で、俺が保護者。

ちよこと頭の螺子の外れた女の子、一般知識と教養には問題ない
が、『ミコニケーション』に多大な難あり。

猫みたいなざんばらな髪と、小柄な体躯はやはり、猫としか表現
できない。なお、ネコ!!!は無い。むしろいらない。

「ふわや～～～」

ぶつちやけ、猫語を理解できる俺でも、読解は厳しい。

つつか、しおみんは着物着てお洒落してもいいナビ、たまひやん
にもさせなくとも……

「なんで、着物なんですか？」

と、代弁姫ツち。

「珠子が、着て行つたほうが良いこと」

元凶、お前か！？

「…………その…………破壊力があるとか」

『「つむ』

「ヤバ」、爺、頷くな！ 爺ひやん、お前のキャラ違つだらうー。そ

「おー」

「…………はあ？」

爺ちゃん、将棋盤に頷いていた模様……一同、白い視線集中。

「……介錯はいるか？」

爺ちゃんの宣言が、死神の囁きに聞こえた。

「……シデン、貴方、最低^{あなた}」

「だが、実際着物でも押さえの利かない、ぼつきゅんぼんの破壊力は並大抵じゃねえぜ」

と、家屋の一階でのボヤキが、俺の耳に届いた。

シデンコロス！

~~~~~

「ふむ、別にいいぞ」

庭は基本的に、爺さんの盆栽地域。

たまに野球ボールが飛んできたら、それを抜刀で斬り飛ばすのが爺ちゃんの偶に発生するイベントで、いまだお目にかかったことは無い。

とりあえず、笹の位置を決定したら、飾りを……

「ただいまなのです～」

帰ってきた。

姫ちゃん。希峰崎<sup>きほうさき</sup> 由姫<sup>ゆき</sup>。やはり俺の保護管轄にて、このボロア

パートの住民。

なお、先の一人は某お嬢様学校（地域認定）の寮であって、御馬鹿な姫ちゃんは、この近所の男女共学学校に通っている。

ついでに付け加えるなら、口リ。小学生並の口リ。典型的口リキヤラ。捻りも糞も無い、口リ。実につまらん

「師匠、誰がお馬鹿ですか？」

「え！俺、喋ってた！ つつか、御馬鹿な姫ちゃんが俺の思考を読むとか…… そうか、ドラマCDだから、俺のナレーションを聞きやがったな！ 驄目だよ、そりやルール違反だよ！」

「？ ？ ？」

姫ちゃん、単発マシンガントークで大混乱。これで少しばしまかせる。つてか、『姫っち』、お前が耳打ちしてやがったのか！

「だ、騙されませんよ…… 姫ちゃん、ちゃんと師匠の顔に書いてあるのを見たんですか？」

「じゃあ、今なんて書いてある」

「……姫ちゃんの胸、大きくなつたかな？」

「残念、それはもう絶望だ」

「むきいいい！」

「つむ、結構楽しい。」

「違いますね。今日は卵パンツかあ、ふふふ。でしょうか」

「しおみん！ お前、俺をどういう風に見てるんだ！」

「うわああん！ 師匠、パンツみるなあああ！」

「見てねえよ！ つつか、大暴れするな、子小美の奴、あとで…… つて、大暴れすッから向こに見えて、か、噛み付くなあああ……」

「……まだ、説教が足りんかったようだの……」

濃口が切れる音がして、俺と姫ちゃんの時が止まった。

爺ちゃん大暴走、追加。声は若本さんを想像してくれたらうれし

いな

「まつたぐ、喧嘩ばかりしていたら先に進まないでしょ?」  
ついに、いつの空氣読んでくれた犬上君が、参戦。

んじゃ、筆を立てましょうか。

「ほえ?、短冊かい」

「おお~ 売れない小説家」

「おお~ 一台詞で俺の自己紹介を纏めてくれやがってありがとう、  
変態」

誰が変態だ。

「兄さんです」 「師匠です」 「貴方です」 「兄貴い~」 「お主じや  
あつはつはつは……」 「実に的を射ているな  
なんのことだか、ここに住民は皆節穴だな。

清原 太平、確かに卖れない小説家。小さな出版社でコラムとか  
適当に書いて、適当に生活しているらしい。

そう言えば、俺の職業柄を聞いて、一遍、取材受けたな。

「しつかし、雅だな。お前に日本文化を嗜む傾向があることは、  
「俺は純潔純粹な日本人だつての」  
「お前の姉貴、外人じやねえか」  
「それとこれとは別」

と、ナーワトモアレ……小説化が仲間に加わった。……?

「おお~ ついに俺たちの物語が小説家に!」

「馬鹿まちがいで遊んでないで、さつさと用意してください。もお」

姫ひめたちに怒おこられながら、しぶしぶ作業再開。つつか、言いだしつぺの俺がしないでびりつするか？

笛竹笛を立てて、飾りつけを買つててくれた姫ちやんを抱えて、天辺にマークをつけて、

「兄さん、何か勘違いしてない？」

「いいんじゃない、静聖夜の名前なまえが名前なまえだし」

やがて、形が出来上がつた頃合ごろあに予定外の人物が、「おうおう、やつてんじやんやつてんじやん」「ほんばんは」。

と、夫婦円満、とは言いいがたい形で、とある「夫婦登場。

地上最強の変態へんたいと、地上最奥の引きこもり嫁。

今日は中学生の娘むすめは連れていない模様。

「静聖夜、今、天光あまね 未来みらいについて考えたでしょ？」

「しおりんは一体、俺をどんな風に見てるんだ」

「聞かなくても」理解できるほどほどの思考を持つておられる、とは思つてあります」

和服姿わふくでしゃりつと答こたえやがる、女狐。

なんとなく若者風体のラフな兄ちやんが、現夢うつ 炎まほ。その嫁さんまよが天光翼あまなつばね。

ある意味お似合おなじあいだが、嫁さんの姿が無い。さりげなく旦那の陰に隠れているが、身長みやうがすりつとじこるので、隠れるに隠れられない。

だが意外にも、典型的なカカア天下の家庭である。

色々あつて、対人恐怖症……といつのが設定。

広めたのは俺だ。そうしてあげないと、人付き合いでできんだろ？

甘いのだ、俺は。

「……誰か呼んだの？」

「いや、実は『デート』」

「うわあ、仲の良い夫婦なのですか～～」

姫ちゃん、喜ぶな。絶対裏がある。

「娘が家出してしまつて」

「深刻じやねえか！ 早く探してやれ！」

「いやあ、どうせ光明寺の糞ガキの場所だらうし」

「高校生と中学生の密会！ ドッキュン、意外な急展開とですかあ！」

「さり気なく、姫ちゃんの同級生だ。光明寺明日斗と書つ、ちょいと変わつた奴だ。

「心配だけど、明日斗君だし」

「アソツも微妙にもてるからなあ。さつ気に気づいてない部分とか、誰かさんにそつくりだし」

「は？ 誰のことだ？」

夫婦の会話に、すつと白い視線が俺に集中する。

まつたく、誰のことなんだか？

「んじや、さつさと願い事書いて、未来つち探しに行くべ」と、俺と『姫つち』はアパートの一階へ上がり、最後の家族を迎えて行く。

何も無い閑散とした居間に、一人たたずんで、ノーパソを弄くつている少女。

静 リナ。

俺の護衛対称にして、友人にして、ダチにして……まあ、色々。親友から預かつた、大切な子にして、俺の命を左右する絶対者にして まあ、どうでもいい。

だから何だつて言うんだ。仲間は、仲間さ。

「……お人好しというか、能天氣ですね。静」「そう言うリナっちは、その短冊は？」  
「願い事、たくさんあるから」  
色とりどりの折り紙を、ちゃんと短冊にしてあるあたり、可愛らしい。

「んじゃ、行こうぜ……」

／＼＼＼

本当、お人好し過ぎて、嫌になる。

私は、静美羅。

静聖夜の妹にして、義理の妹にして、その実、単なる妹。彼の瞳には、そとしか写っていない。

それはそれで、寂しい。

それに、私を見るときにはいつだって、『兄』が重なる。銀髪碧眼、鬼とも魔神とも美神とも呼ばれた、私の『兄』。

短冊……私にはきっと、書く願いなんてない。

『どうか、振り向いてください』

／＼＼＼＼

アフターぬ／＼ん

「……やれやれ」

深夜。アパートの短冊に、三人の人影。

「あんたさあ、それ、恋敵に塩送るのと同じじゃないの？」

嘆息付いた私に、アンジュが呆れたように、自分の願いを吊るす。  
……『天上天下唯我独尊』。何がしたいのよ……

「何がしたいねん」

「ん？ 世界が私のものになりますよ！」

「もう自分の物だつての」

「違うわ、今は貴方のものだわ」

と、静に向かつてアンジュはしなだれ……「ルワアアアア！」

「で、スフィーは何て？」

「願いは他人に見せたら価値が下がるわ」

「他人かよ〜」

「願いの対象だった場合、適う価値が変動するでしょ？」

別にたいした願いじゃない。

『静が怪我をしませんように』

つて、ひつたくれたあ！

「はんはん、こりや 静には見せられないわねえ」

「はあん？」

「返せ馬鹿あああああ！」

大奮闘の末、と言つか、静が空気を読んだのか  
がかなつたら、とあつさり引いてくれたのか。  
願いは届いてくれるのだろうか。

ついでに、美羅の短冊も飾つてやる。

別に、恋敵とか、友人だからとかじゃなくつて……なんだらう。

「フェアじやない、だろう？」

「なあ！ 人の考え方まないで！ ……つて、アンタ、まさか、姫  
つち……美羅の願い、気づいてるの？」

「人の夢と書いて儂い。違うね、儂いからこそ、人は夢見る。それ  
を叶えるのは、自分自身、そう思うから」

「質問の答えになつていない。場合によつては、殴るわよ  
手の平で。その答えは、あまりにも残酷すぎる。

「正直、俺の勘違いや自惚れかもしないつて線もあるんだ。だから、一概に、あつさりというべきじやないし、駄目だと思うし、何  
より

「何より何よ」

「フェアじやないさ」

思いつきり、叩いてやつた。

「あ～あ……」

と、アンジュが暢気に七夕を眺めて、一言。

「今が一番幸せなのにね」

(後書き)

間に合つた！ まだ7月7日だ！（日付変更前：

ほのほのと書きたかつたんだい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6106e/>

---

七夕 7/7

2010年10月8日15時56分発行